

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原一夫 TEL06-6833-9227
広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田茂夫 TEL072-850-5781
<http://www6.ocn.ne.jp/~nakabc/omc-news/kaiho.htm>

平成24年9月(2012年)No.561

「懐かしの8ミリ映画を楽しむ会」 盛会にて終了

去る9月2日(日)朝10時半上映開始で開催された往年の名作、話題作、貴重な記録を集めた映写会は、会場満席の大盛会裡に終了しほっとしました。こういうムカシのフィルム作品を観に来る人がどれだけいるかほとんど見当もつかないまゝ心配していましたが、安心しました。

今は亡き当時共に8ミリを楽しんでいた仲間たち、今でも活躍しておられる若い頃の友を見るにつけ、映像の持つ記録性と素晴らしさを改めて認識いたしました。第2回もやろうという声が早速上がっていました。

大阪アマチュア映像祭は11月4日(日)13時開催

このほど大阪アマチュア映像連盟の各代表者があつまってプログラム編成会議を行いました。この結果今年は19本の作品が上映されることになりました。OMC所属会員さんの作品名と作者名は次の通りです。

⑨長刀鉾解体：前田茂夫、⑩雪の竹田城址：江村一郎、⑪嵯峨野点描：有村博、⑫北山杉伝統技法本仕込み：高橋辰雄(敬称略)

■OMC映像フェスティバル動員にご協力ください

10月7日(日)開催の当クラブ映写会には会員各自、動員の方よろしく

8月例会のレポート

例会日の25日と云えば外は残暑きびしいが例会場は冷房が効いていて上衣がなくて寒い位の避暑気分。今月も作品多く時間一杯の大忙しだった。

司会、有村氏、書記、関氏、映写担当、江村、井上両氏、受付、宮井氏

■出席者：有村、井上、上田、江村、岡本、上総、蟹江、紙本、黒田、関、合原、進藤、高瀬、華岡、前田、宮井、宮崎、森口、森下、森田、山本、吉岡の22氏(敬称略)と作品14本と撮影会最優秀賞紙本作品の計15本。

9月例会のお知らせ

9月例会は第5土曜日29日18時よりとなります。第4土曜ではありませんのでお間違え無き様に。場所はいつものJR難波OCATビル4階市民学習センターです。気候よし、皆様のお越しをお待ちします。

■先ず4月6・7日に行なわれた近江の沙々貴神社火祭り撮影会でみごと最優秀賞を獲得された紙本勝さんの作品「沙々貴まつり」BD・14分10秒を上映。

例会作品（今月の講評は関世話役です）

1、中国新疆ウイグル歌謡団 BD

15分00秒 吉岡貞夫さん

西九条のクレオ大阪における公演のもよう。舞踏、寸劇、日本語の歌などもあるショーだが、エキゾチックで衣裳も綺麗。後半、カメラマンに前を完全にさえぎられた場面は、普通ならカットだが、皮肉にもこれが単調さから救われているような気もする。作者にそこまでの計算があったかどうかは判らないが、定位置からの撮影で15分も持たせたのはさすがだ。中国の歌舞団と言えばアクロバットのような京劇を思い浮べるが、あれは主に漢族の劇団。このウイグル歌謡団は質的にも全く違うものだった。顔立ちは中東や西欧に近い。日常の言葉も中国語ではないだろう。広い中国。その北西部に位置する新疆ウイグル自治区は約半数がウイグル族、その他少数民族も多いが、チベット同様牛耳っているのはやっぱり漢族。最近あちこちで騒ぎが起きているそうだが、いろんな意味でこの人たちを応援してあげたい。

2、ボロブドゥール BD

8分54秒 華岡 汪さん

ジャワ島にある世界最大級の仏教遺蹟。かつてここにはインドから仏教がもたらされ、数代の王朝による仏教王国が栄えていた。その隆盛を物語るのがこのボロブドゥール遺蹟で世界遺産になっている。独特のストゥーパは、それ自体が大乗仏教の宇宙観を表していると言う。三界の思想（慾界、色界、無色界）に基づいて各回廊に張り巡らされた精緻なレリーフを作者は綿密に撮っていた。8世紀頃すでにこのような彫刻技術を持っていたとは素晴らしい。この国は人口の9割がムスリムと言うが、ほぼ完全な形で現在まで保存されているのは、原理主義がここにまで浸透していないこと、それと穏やかな民族性によるのかもしれない。

3、涼を求めて BD

7分30秒 有村 博さん

須磨離宮公園の噴水庭園を、夕暮から照明に彩られる夜間までの情景をさまざまな

角度で丁寧に撮っている。早いシャッタースピードで水玉が連なって飛び交う様子が面白い。題名どおりの「涼」に浸っていたら、ラストに「暑くて暑くて全身大汗をかけた」のテロップで「涼」がいっぺんに消し飛んだ。

4、山鉾にひかれて BD

9分45秒 進藤信男さん

日本三大祭と言うが、その伝統と絢爛豪華さにかけては日本一だろう。この作品は多くの人々で賑わう宵山の模様である。四条新町を中心にしたほぼ1キロ四方に殆どの山鉾が集中していて、唐櫃のみの大船鉾も含めるとその数34基。これをすべて撮影して回るのはいへんだが、酷暑のなか作者は長刀鉾を皮切に、四条通りに面した5基をはじめ北は役行者山、南は白楽天山まで、全体のおよそ半数を巡回していた。山鉾それぞれ独自のちまきや物品の販売に声を枯らす大々、また鉾たてを務める商家は老舗が多く、普段は古めかしい格子戸に暖簾が風に揺らめく静かな風情だが、この日ばかりはどこの店も大忙し。そのような様子がこまめに撮られていた。山鉾は動く美術品とも言われるが、今回は多くの山鉾めぐりが目的だったため、その辺りは軽く流されていた。もし来年も可能なら10日頃から始まる鉾建てから飾り付けまで、とくに美術的価値の高いタペストリなども作品にしてほしい。

5、川渡り神幸祭 BD

15分20秒 紙本 勝さん

5月第3土日は福岡県田川市伊田地区にある風治八幡神社の例大祭。その昔、疫病平癒の祈願が成就した御礼に山笠を建立し祭を奉仕した事に由来するそう。始めに境内で子供たちの踊りと獅子舞が奉納されたあと、神様を乗せた60人余りで担ぐ大神輿を先頭にバレンと言われる五色の房のような飾りを屋根いっぱい広げた11基の山笠が彦山川に入っていく。腰まで浸かって大きな山笠を一斉に前後に揺らす“がぶり”はまさに壮観。川岸で撮る作者とはかなりの距離だが、人々のアップがすごい。20倍ズームの威力を見せつけられた。しかし4~5トンはあるような山笠が川の中で暴れると車輪が土砂に埋まって動けなくなるが、どうやら川渡りのためにこの付近の川底はコンクリートで舗装してあるらし

い。その後、対岸にある御旅所へ巡幸。ここですべての山笠が神様と共に一泊。この伊田地区はもとは炭鉱で栄えた町で今も2本の大煙突が記念物として残っている。

翌日は御旅所前の広場で炭鉱節に合わせて時ならぬ盆踊り。ここはあの有名な炭坑節の発祥地だった。帰りの山笠も再び川に入りがぶりを繰り返す。そして町のあちこちでがぶりながらそれぞれの町に引き上げていった。神様が乗った神輿も神社に帰り祭はおわる。小さな町の大きな祭に酔い痴れた。

6、ジャール平原 BD

8分20秒 山本正夢さん

托鉢の少年たちが見つめる視線の先で、あの婦人は何を作っていたのだろう。モン族のマーケットを見ると、そんなに貧しい国でもなさそうだ。ぶら下っていたのは狐か狸か。ベトナム戦争当時、この辺りにホーチミンルートと言う北ベトナム軍の補給路があった。路と言ってもけもの道のようなもので空からは判らない。そこで米軍はただ闇雲に絨毯爆撃を繰り返した。何とこの地域の住民ひとりに1トンの割合で爆弾が投下されたという。内戦もあったから、不発弾や地雷がまだそこら一面に残っているらしい。作者が撮影中にも爆弾処理らしい爆発音が聞こえた。モン族の村を訪れたら不発弾の殻で、椅子、店の飾り、植木鉢、はては家の垣根や高床式家屋の柱まで不発弾の殻で出来ていた。転んでもタダでは起きないモン族魂を見た気がする。この辺りは謎の石壺が散在する唯一の観光資源だが周囲は爆撃の穴だらけ、そして決められた場所以外は歩けない。今も年間100人以上が不発弾の被害に遭っているという。ラストで闘牛に興じる庶民の姿にほっとした。

7、伊吹山花紀行 HDV

7分40秒 森口吉正さん

若狭湾と伊勢湾に挟まれ、本州のぎゅっと締まったほぼ中央に伊吹山が聳えている。と言っても標高は1377mだが、近江路を行けば最も目立つ山でもある。9合目まで車で登れ遊歩道も整備されているのでこの時期はハイカーも多い。作者が登ったのは7月下旬か8月上旬だろう。シモツケソウ、メタカラコウ、シシウドなどが真っ盛り、その他の夏の花も種々記録されて

いた。作者が「もうすぐ頂上ですよ」と声をかけたが無言で通り過ぎたご婦人方。脚本のひとつと思うが、なにか虚しい風が吹き抜けたような気がしてならない。おりしも霧がかかり風も出てきた山頂は灰色。下界はまったく見えなかった。

8、ハックGH2暗所性能 BD

7分01秒 井上勝彦さん

作者のタイトルは横文字が多くて判りにくい。要するに Panasonic LUMIX DMC-GH2 という高性能デジタル一眼カメラの仕様の一部を書き替え、夜の都会でどれだけ明るく鮮明な動画が撮れるかの試し撮りをされた映像だ。JR住吉駅付近の夜景。たしかに明るい、と言うより明る過ぎて色の飛んでしまった部分もあるが ISO 12800 の超高感度でも夜空にほとんどノイズが見られないのは驚きだ。映写が始まってすぐに感じたのは、物の輪郭がはっきりしていること、それと夜間の肉眼で想像する色との違いだ。前者はずば抜けた画素数。後者は結果的に露出オーバーになったことによるものだが、蛍の草叢はややノイズがでていた。私たちのようにフィルムから映像の世界に入った者は、ビデオに変わった当初は Latitude(露出寛容度)の狭さに悩まされた。つまり明暗の差が大きい被写体をフィルムでは撮れても、ビデオは明るいところの色は飛び、暗いところは潰れてしまうことだ。CCDからCMOSに進化。このGH2はLiveMosという最新のセンサーらしいが寛容度についてはまだフィルム並みとまでは行ってないと私は思う。

9、大井川旅情 BD

7分00秒 上田吉巳さん

金谷から千頭まで、大井川鉄道の全線をSL列車に乗り、寸又峡温泉に泊まるツアーにご夫婦で参加されたときの作品。一昨年の撮影会が大井川鉄道とその沿線風景だったので懐かしく拝見した。ただ撮影会ではSL列車に乗った人は居なかったから、車掌さんのサービスなど列車内の様子を見るのは初めて。SLの機関室に入って撮らせてもらえるとは知らなかった。寸又峡の吊り橋は中央に細い板二枚を渡してあるだけ、よく揺れて下が丸見えで恐ろしい。作者は揺れる吊り橋を歩きながら後からこわごわ追ってくる奥さんを撮っていた。どんな撮り方か、そこらがミソ。今回はこの先

のアプト式鉄道編を予告。

10、沙々貴火まつり BD

12分50秒 前田茂夫さん

撮影会作品コンテストではテープで出品されて音声がでず、努力賞で終わってしまった作品。それをBDに焼きなおしたもので改めて拝見したが、やっぱりナレーションがあるのと無いのとでは大違い。もしかしてコンテストはこの作品がトップに選ばれていたかも知れない。原因はいまだに不明だが、常に器材の保守点検を行なうことが大切だ。器材管理者として責任を感じている。

11、2010 YOSAKOI 番外編

HDV 7分00秒 江村一郎さん

あのリズム感と身体の動きが若者に受けるのか、いまは全国どこでも何かイベントがあるとよさこいを踊っている。しかしよさこいはやっぱり高知。規模が全く違うから。作者のよさこいも10作品を越えただろうか。そのつど撮り方を変え、編集を工夫し、構成を考えて、前回の作品より進化する努力を重ねているのをいつも確認していた。この作品も今までとは違った視点で構成され、また別の新鮮味を持っていた。題名の「番外」の意味を司会者が問うと「もう作りようがない」と話す。常に内容の向上を計りながら同じテーマに挑戦し続け、行き着くところまで行ったと言うことか。ならばまた原点に戻り構成を根本から変えてみよう。どれかのグループに的を絞って、練習から撮っていく方法もある。交渉の時間も時間もかかるが、それは一つのドキュメンタリー。作品に厚みが増す。

12、大原女装束時代行列 HDV

7分19秒 宮崎紀代子さん

風薫る5月、洛北大原で一大イベントが開催された。地元の小学生や婦人会、それに女性の観光客も加わり、勝林院から寂光院まで、普段はのどかな山里を2時間かけて賑やかに練り歩く。平家滅亡後、建礼門院が大原の里に隠棲した際に仕えた阿波内侍が、生活の糧に頭に柴をのせ、京の町で売り歩いたときの装束が今に伝わり時代行列の発祥になったらしい。白い脚絆にわらじ履きの足元、黒髪に手ぬぐいを掛け、紺の着物を短くまとして緋の前掛けを赤い帯できりりと結び、柴を乗せたあどけない顔、石垣を背景にした大原女の列。そのどれも

が作者独特の感性で表現されていてすばらしい。室町、江戸、明治・大正、それぞれの時代で装束も違うそうだが、私にはその区別が付かなかった。前期のフィルム時代にここで撮影会を行なった。こんな催しも無かった昔だ。地区のお年寄りから借用してモデルさんに着てもらった装束は、すぐじみで今とはだいぶん違ってたと記憶している。

13、四天王寺 SSD

8分08秒 森田光春さん

大阪市内では最も大きなお寺。弘法大師と聖徳太子の命日にあたる毎月21・22日はお大師さん、お太子さんと言われ周辺の参道は賑わう。西門の大鳥居から境内に入った作者は先ず西大門左の親鸞聖人旧跡がある見真堂へ。それからは通常の拝観順ではなく、南から北へ、西から東へと無作為と言うか、作者の気の向くままに七堂伽藍を順回しておられた。もし画面どおりの順序で撮ったとしたら、あの広い境内を隅ずみまでかなり歩き回ったことになる。しかし普段は気付かない小さなお堂、地藏、石仏、石碑なども詳細に撮られてあり、カメラを三脚にがっちり据えてあったから時間もかかったと想像する。ナレーションのソフトは初めてのご使用と見た。不自然な言葉と発声で聞き取りにくい。言葉の区切りや間(ま)、イントネーションなどの調整などに慣れて頂きたい。

14、歌い継がれて95年 琵琶湖周航の歌

BD 14分10秒 高瀬辰雄さん

加藤登紀子の歌で始まる作品。誰もが知る歌だが、物事がめまぐるしく移り変わるこのご時世で、作詞・作曲者の名を覚えている人が今どの程度いるだろうか。これは琵琶湖の遊覧船上で催された元某局アナウンサーの講義の模様を写真や周辺のゆかりの景色を挿みながら解説する作品。客船を借り切ったの催しで多くの人々が参加していたのを見ると、結構皆さん関心があるようだ。発祥の地、高島市民の誇りでもある。今津港棧橋のたもとに佇む歌詞の碑は、乗降客の気を引く派手な色と奇妙な形で立っていた。

15、初夏の加太海岸へ BD

3分15秒 宮井 健さん

時間切れで翌月回しになりました。申し訳ありません。